

サンクンプラザのプログラム

バラタナーティヤム古典舞踊

インド4大古典舞踊の一つで、インドを代表する最も美しくダイナミックな舞踊。南インドタミール・ナドゥ州南東部、特にチェンナイ市を中心に行われています。

この踊りはデーヴァダーシーというヒンドゥー寺院に所属する女性によって伝承されて来ましたが、デーヴァダーシーが次第に遊女のようなものになっていき、舞踊は衰退していきました。20世紀の初頭、植民地統治の中でこの舞踊は寺院を離れ、舞台芸術として再生され、一般の人々がこの舞踊を学び楽しむようになりました。

詩は神への完全な祈りによって新たな生命を得るというテーマに貫かれています。

バラタナーティヤムの曲は、ヌリッタという純粹舞踊とアビナヤという表示的な意味をもつ舞踊の2つの要素から構成され、踊り手はアビナヤの部分で自己を最高に表現するといわれています。

出演者について（すべて女性です）

N.Cハリニ（インド人）：カルナータカ州ハイデラバードより来日予定。

マチコ・ラクシュミー（日本人）：1987年よりインドへ毎年わたりバラタナーティヤムを学ぶ。東京、埼玉などで舞踊の指導をし、また、日本各地で公演をするなどインド舞踊の普及に努めている。

里見まこ（日本人）：国内にて8年間バラタナーティヤムを学び渡印、チェンナイにてさらに学ぶ。現在は埼玉県戸田市にて指導するかたわら各地のイベにも出演する。

シタール演奏

シタールは北インドの弦楽器で13世紀に生まれた。共鳴部分はヒョウタンでできていて6～7本の演奏弦と11～12本の共鳴弦が張られている。

インド古典音楽の代表的な楽器といえ、元ビートルズのジョージ・ハリスンが弟子入りしたシタールリスト、ラビ・シャンカールは特に世界的に有名である。

演奏者について

チャンドラカント・サラデシュムク：ラビ・シャンカールよりわずか8歳で内弟子に迎え入れられた天才シタール奏者。1991年に来日し今までに日本各地で200回以上の公演活動を行う。現在は日本に在住、海外でも活動を行っている。

辰野基康：1978年シタールに出会い渡印、3年間学ぶ。その後、古典音楽を学び続ける一方、シタール奏者として、コンサート、録音、レクチャーなどシタールにかかわるさまざまな活動を行っている。

アルナーチャルプラデーシュ民族舞踊

アルナーチャルプラデーシュ州はインド北東端の秘境の地で、そこには多くの少数民族が住んでいます。この人々は「ドニポロ」ドニは太陽、ポロは月という意味で、宇宙エネルギーである「ドニポロ」を信仰しています。日本の古代神と似て、森や山、石、川など森羅万象に靈魂の存在を認め、自然崇拝をするアニミズムです。また日本に似て、裕の服(着物)、はちまき、手っ甲、脚絆、大きなつばのある刀、「食」では納豆(葉の中に煮た大豆を入れて作る)を食しません。

今回の公演は日本と多くの共通点をもつアルナーチャルプラデーシュ州の4つの少数民族の素朴な歌や踊りをご紹介します。

ヤシの繊維や、動物の毛皮、手織りの布などからできた衣装をまとい、天然石のアクセサリを身につけて、楽器という楽器をほとんど使わない(太鼓も殆ど使わない、大変古い文化と考えられる)素朴な音楽や踊り。演目は、戦いの踊り(威嚇し、霊を祓うような踊り/男性)、女性たちによる祭りのときに踊られる歌と踊り(甚句、盆踊りの様)、祈とう師による歌他、バラエティに富みます。

ダーガル・ヴァーニー音楽

ドゥルパッドという北インドの超古典音楽はインド音楽の母ともいわれ、シタールやサロードの器楽、カヤールやトゥムリなどの音楽の発展のベースとなりました。宇宙的な元祖インド古典音楽は、なかなか日本では紹介される機会のない貴重な公演です。今回は6百年の伝統を伝えるダーガル家のワシフディ

ン・ダーガルのグループが来日し公演します。ワシフディン・ダーガルのヴォーカルに、両面太鼓のパッカワージ、弦楽器のタンブーラー演奏が伴う。

今回の公演の目玉で、50周年事業にふさわしく現地と同様な時間（1時間半）を用意する、必見、必聴の音楽です。

天竺尺八による北インド音楽

天竺尺八という名称は、ホフマン氏(アメリカ人)の命名によるもの。ホフマン氏は、日本で尺八を学び、インド音楽大学で古典音楽を学んだ後、アジアや欧米諸国で演奏活動を展開。今回は、インドの楽器タンブーラ、タブラパーヤーと共演の予定。

芝生広場のイベントについての一部説明

ヨーガ

インドには神や自然と一体となるという考えがあり、ヨーガは心を空にして魂の合一を図る方法論。禅宗の寺で行われる座禅もその一つと言える。空になるために身のかたさなど障害になる肉体を正するのがヨーガです。ですから健康になるためのものというのは側面であって、精神と肉体の一体をめざすトレーニングの方法です。

今回は来日して 25 年になるヨーガの指導者ゴーシュ氏のお話と日本ゴーシュ・ヨガ道場の人たちによる模範演技が披露されます。

アルナーチャルプラデーシュ州のシャーマン

シャーマンは、人が死んだ時に魂が災いをもたらさないように祈祷したり、病気治しや結婚式など、アルナーチャルプラデーシュの人たちの生活にとって、欠くことのできない重要な存在。(日本で言えば、僧侶、神主、呪術師の役割を担います。)

アルナーチャルプラデーシュの子どもの遊び

通りゃんせや石を使ったお手玉など、かつてこれらに似た日本の子どもたちの間に広く見られた遊びを紹介する。

ワルリー画教室

インドには 500 以上の先住民(アディバシーと呼ばれている)がいます。ワルリー族もその一つで、ムンバイから北におよそ 100 キロほどのところに住んでいます。結婚式の時に描かれる壁画を紙に描かれたものがワルリー画と呼ばれ、世界的な評価を受けています。今回は、若手ナンバーワンとして注目されているバルー・ジヴァ・マーシェ氏とゴルカナ・シャンタラーム氏の二人の描き手が展示会場で公開制作、およびワークショップを行います。

プラザ 1：日印国交樹立 50 周年記念展

今から 50 年前の 1952 年、独立したばかりのインドと戦後の日本が平和条約を調印し、国交を樹立しました。

インドと日本の交流の歴史は古く、文化的にも深いつながりを有していますが、親日的なインドが戦後復興に果たした役割は大きいものでありました。

それらの中からパール判事、象インディラにスポットをあて、当時を振り返る貴重な写真などを紹介します。

敗戦の翌年 1946 年極東国際軍事裁判が開廷され、2 年間の歳月を経てこの軍事裁判は終了しました。11 名の連合国判事の一人、インドのパール判事は、戦勝国によって裁く裁判を「国際法違反である」と主張しました。その裁判で使われたパール判事の椅子やパール判事の写真、他の展示。

1949 年ネルー首相が、台東区の子ども議会の子どもたちの要望に応じて娘の名をつけた象のインディラを贈りましたが、この出来事は、占領下にあり、いたるところにまだ廃墟の残る日本の国民に明るい灯火となりました。そのインディラの 30 年間の足跡を、東京湾芝浦港に到着から全国移動動物園の様子、ネルー首相との 8 年振りの再会など、当時の貴重な写真を紹介。

資料提供：インド大使館、パール下中財団

プラザ 2：再生する伝統～インド・民族アートの新たな挑戦～

ビハ - ル州の東北部とネパール南東部を含むミティラー地方と呼ばれる地域で、母から娘へと女性たちによって三千年もの間伝承されてきたといわれる壁

画や床絵のミティラー画。マハーラーシュトラ州ターナー県に住む先住民族ワルリー族によって描かれるワルリー画。先住民ゴンド族によって儀礼の折りに家の土壁に描かれてきたゴンド画。アーティスト・イン・レジデンスとして招待されたそれらの描き手たちによって、新たな民族アートとして現代に蘇った、創造的な作品を紹介するものです。自然・宇宙との深いコミュニケーションを持ち、豊かな伝統と精神性に基づいて描かれる絵画は、観る者に強いインパクトを与えます。会場ではワルリー族のアーティスト 2 名による公開制作が行われます。

協力：ミティラー美術館